コラム　子どもの学びをつなげる

2006.4 月

私事になるが，今春，思いがけない異動命令により転勤した。２年間という短い勤務で驚いた。「何か悪いことしたのでは？」と，友人に言われても仕方ないかもしれない。保護者が分かり地域が分かり，子ども一人ひとりの学び方も分かってきて，学校経営もこれからという時にとても残念だ。

しかし，待っている子どもたち・保護者がいる，待っている地域があると思えば，新たな希望も湧いてくるものだ。

４月になるといつも思うことがある。担任をしていた時は，「昨年度より楽しい学級にしたい。」「独自な取組で子どもを主体的に学ぶ存在したい。」など，学級の子どもたちと出会うことを楽しみにした。始業式の初めての出会いに，さらに その意欲が湧いたことを思い出す。ある研究者や実践者の考えを学級経営に使うことも考えた。

これらのことは本当によかったことなのか，疑問である。よく学年主任や校長が黙っていたものである。まったく独りよがりであり，独善的と言わざるを得ない。
なぜ，昨年度より楽しい学級なのか，またなぜ主体的な学びなのか，その根拠はどこからきたものか怪しい。当時，学校教育目標や昨年度の実態を根拠にすることは考えていなかった。もっと言えば，この１年間の役目を果たすこと，保護者から非難されなければいいなどをめざした自分がいる。

このような，１年間で促成栽培するような考えからは，実際子どもは育たないし，次年度への自己実現への意欲も保証できない。一人が独自の考え方で頑張ってもだめである。学校の組織体制の中で６年間の子どもの力や成長をとらえないと，毎年分断されることになる。この繰り返しの中で，子どもたちは学年が変わるたびに，心構えをリセットしてきた。これは，新学年への意気込みや期待であるかもしれないが，その裏にあるこれまでの担任と築き上げた学習スタイルやルールはご破算していないであろうか。このような考えは，今は論外と考えたい。

では，どうすればよいか。昨年の９月のコラムに書いた「子どもの学びで変容するカリキュラム」に書いているように，カリキュラムをつないでいく考え方が重要である。間違えないでほしい。画一的な指導を望んでいるのではない。昨年度の学び方や学級経営の根底にあるものを引き継ぎ，ステップアップをねらっていくのである。したがって，１年生においては保育園の実態を取り込み，６年生においては中学校の学校方針と連動させる必要性がある。学校教育目標の具現化をねらった全教育活動のはずであるから，子どもの側で考えながらカリキュラムを創造していくことが肝要である。言うことは簡単である。しかし，取り組まなければ学校は変わらない。夏季休業中がその作業となろう。

（芝）